



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	高齢者のピアノ学習支援の方法：初歩の学習者へのインタビューから(fulltext)
Author(s)	石川,裕司
Citation	東京学芸大学紀要. 芸術・スポーツ科学系, 67: 1-11
Issue Date	2015-10-30
URL	http://hdl.handle.net/2309/139618
Publisher	東京学芸大学学術情報委員会
Rights	

高齢者のピアノ学習支援の方法：

初歩の学習者へのインタビューから

石川裕司*

音楽科教育学分野

(2015年6月29日受理)

ISHIKAWA, Y.: Methods for Supporting Elderly Piano Learners, From interviews with piano learners in the first steps. Bull. Tokyo Gakugei Univ. Division of Arts and Sports Sciences., 67: 1-11. (2015) ISSN 1880-4349

Abstract

This study investigated support for piano learning later in life through interviews with three elderly persons who had been learning the piano since the age of 68, 73 or 79. Looking into what the elderly interviewed in this study found difficult in their piano learning and the support actually provided by instructors for their piano learning revealed that support by piano instructors was often unsatisfactory to elderly learners, and that their advice on music and musical performance might hamper elderly learners in their performance. The study found out that “persistent” discussions and information sharing between piano instructors and learners and more consideration by instructors for the individuality of elderly learners rather than collectively seeing them as “the elderly” were necessary for resolving discrepancies between support essentially needed by elderly piano learners and support actually provided by their instructors.

Keywords: elderly persons, piano, learning support

Department of Music Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨： 本研究は、65歳を過ぎてピアノ学習を開始した高齢のピアノ学習者3名を対象として半構造化インタビューを行い、高齢者のピアノ学習支援の方法について検討したものである。

高齢者がピアノ学習において難しいと感じたこと、また、実際に指導者が行ったピアノ学習の支援について検討した結果、ピアノ指導者が行う支援には一定の満足感を持ちつつも、学習環境の改善や助言等においては、学習要求とのずれがみられた。例えば、音楽や演奏に関する指導者の助言が学習者の演奏の妨げになっていた場合などである。そうした、学習者が本質的に欲している指導者からの支援と、指導者が実際に行う支援のずれを解消するためには、ピアノ指導者と学習者の話し合い及び共有が「継続的」に必要とされること、高齢者として一律に学習者を見なすことなく、個別性に配慮しつつ学習を進める必要がある。

* 東京学芸大学 音楽・演劇講座 音楽科教育学分野 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)

1. はじめに

高齢者のピアノ学習は、近年盛んになりつつある。それは、ピアノを演奏する一連の過程において、加齢に伴う身体的機能や能力の低下に対し、一定の効果があげられることに注目されていることなども一つの理由であろう。そうした中で課題となるのは、高齢者のピアノ学習支援の方法である。

これまでのピアノ学習は、いわゆる子供のお稽古ごととして学ばれることが主流であり、子供のピアノ学習、あるいは大人になって再開した成人のピアノ学習者に関わってきたピアノ指導者は多いものの、人生の後半、とりわけ高齢期にあるピアノ学習者の支援については、経験的にも研究的にもほとんど蓄積されてこなかった領域であるといえる。果たして、ピアノ学習のプロセスは学習者の年齢、あるいは人生の各期に関係なく同じようなものなのか、あるいは、高齢期にあるピアノ学習者の特性、例えば運動機能や認知的側面への配慮、助言の在り方などについて考慮する必要があるのだろうか。本研究では、高齢期からピアノ学習を開始した3名のピアノ学習者への半構造化インタビューを通して高齢期のピアノ学習の支援の在り方を考察することとした。

尚、本研究では、高齢者を通例的な65歳以上の者として述べることにする¹⁾。

2. 高齢化の状況とピアノ学習

日本は、人口の高齢化が進んだ「高齢化最先進国」と言われている²⁾。平成24年10月1日の人口推計では、65歳以上の高齢者人口は3079万人で、高齢化率は24.1%であった³⁾。この高齢化率は今後も伸び続けるとされ、2024年には30%を超え、2035年には3人に1人が65歳以上になるという⁴⁾。高齢化が7%から14%に至る倍加年数は24年となるため、126年をかけて進んできたフランス等と比べて、社会全体の制度化というものへの対応も急がれる⁵⁾。そうした政策面と同様、個々の余暇活動など高齢者のいきがいという面も重要なものとなってくる。

高齢者への対応において指摘されているのが、高齢期の人々に対するいくつかのバイアスである。現実的な問題として、介護の必要性やさまざまな身体的機能の低下等も考慮すべき時期ではあるものの、発達を捉える一つの概念「エイジング」という語には、人生の後半部を中性的で自然な観点から捉えようとする姿勢でもあるとしている⁶⁾。

こうした人生の後半の生き方を考えるうえで、生活を充実させて楽しむことを重視する人の割合をみると、20～29歳が39.4%、30～39歳が34.3%、40～49歳が41.5%、50～59歳は58.0%であった。これに対し、60～69歳は79.7%、70～79歳は82.4%であった⁷⁾。

この調査では、60～69歳として一括りになっているため、本研究で設定している65歳以上という点について言及することは難しいものの、59歳までとは割合は大きく異なる。そうした生活を充実させて楽しむもののひとつとしてピアノ学習も学ばれると考えられる。公的施設においてもシニア向けのピアノ講座の参加希望者は多く、競争率も4～15倍と比較的高い楽器であるという⁸⁾。

このように、高齢者を対象としたピアノ学習は人気の高い活動といえるが、その際、検討すべき課題はいくつかある。

例えば、子供がピアノ学習を継続した場合、演奏に関わる身体的機能は概ね発達の指向をもつが、高齢者の場合は、演奏に関わる身体的機能は発達と衰退の側面を持つ。そうした場合、高齢者のピアノ学習には、子供を対象としたピアノ学習とは異なる支援が必要なのではないか。さらには、65歳を超えて始めた学習者は、さらなる支援が必要になるのではないかということ等である。

3. 1 研究の方法

先に述べたような動機から、本研究では、高齢者のピアノ学習支援について考えるため、65歳以上のピアノ初歩の学習者3名を対象として半構造化インタビューを行うこととした。

実施は2015年4月である。インタビューは1人25分から30分、それぞれの通うピアノ教室で個別に行った。インタビューの際、指導者は同席していない。

主として設定したインタビュー項目は、ピアノ学習の動機（主に開始時）、ピアノ学習で感じた難しさ、現状のピアノ学習で感じていること、学習への要求・支援である。

3. 2 インタビュー対象者

本研究におけるインタビュー対象者は、次の3名である。

①学習者A（男性）

- ・インタビュー時の年齢 69歳7か月
- ・ピアノ学習開始年齢 68歳1か月
- ・ピアノ学習の継続期間 1年6か月

・主な使用教材 大人のためのピアノ悠々塾基礎編 (ヤマハミュージックメディア)

- ・取り組んでいる曲「マイハートウィルゴーオン」
- ・指導者の年齢40歳 (男性)

②学習者B (女性)

- ・インタビュー時の年齢 76歳5か月
- ・ピアノ学習開始年齢 73歳4か月
- ・ピアノ学習の継続期間 3年1か月
- ・主な使用教材 ブルグミュラー 25の練習曲 (全音) ピアノ名曲110選A (ドレミ楽譜)

- ・取り組んでいる曲「お人形の夢と目覚め」
- ・指導者の年齢 48歳 (女性)

③学習者C (女性)

- ・インタビュー時の年齢 86歳2か月
- ・ピアノ学習開始年齢 79歳10か月
- ・ピアノ学習の継続期間 6年4か月
- ・主な使用教材 ギロック抒情小曲集 (全音)
- ・取り組んでいる曲「秋のスケッチ」
- ・指導者 41歳 (男性)

学習者Aは前期高齢者、学習者Bはピアノ学習開始時が前期高齢者でインタビュー時は後期高齢者、学習者Cはピアノ開始時から後期高齢者である。尚、本研究では、前期高齢者と後期高齢者の特性を検討すること、および継続期間によるインタビュー内容の比較等は念頭においていないことを付記しておきたい。

4. 結果

インタビューの結果は以下のとおりである。□内の下線、及び () の補足は筆者による。尚、学習者A、学習者B、学習者CはそれぞれA、B、Cとした。

_____は、学習者が自身を高齢者と捉えて語った内容である。

4. 1 ピアノ学習の動機—多様な動機

A. 昔はギターをちょっと遊び程度でやっていたんですけど、ピアノは何十年前から弾きたいなと思っていました。うちはそういう環境もなかったので、自分の体もちょっと落ち着いてきたので習いたいなという感じですね。

B. 一番は、ボケ防止です。生きていうちで最後に何か挑戦したいと考えた中で、テレビで何度もピアノは頭に良いつてやっていたから、これがいいかなと思いました。家に娘が弾いた

ピアノもあったし、娘がピアノを弾いているのを聴いて私もやりたいなと思っていたし、なによりせっかくのピアノがもったいなくて。憧れの曲 (パダジェフスカ作曲「乙女の祈り」)は無理だってわかっているけど、いつか弾けたらいいなと思っています。

C. どうしてもきちんとピアノを習いたいと、かねがね思っていましたら。教えてくださるとおっしゃってくださったから始めました。小さい頃から習うことができなくて。体が弱かったことですし。

学習動機はそれぞれ異なる理由が挙げられた。「ちょっと体が落ち着いてきたので習いたいな」というA、それに対して「生きているうちで最後」と考える種の覚悟を持って取り組むBや「どうしてもきちんとピアノを習いたい」Cなど差がみられた。意欲に差は表れているものの、共通してピアノ学習は長年気にかけてきた習い事であり、ピアノを弾くことが「憧れ」である点が共通している。それは、Aの「ピアノは何十年前から弾きたいなと思っていました」や「うちはそういう環境もなかった」という語り、Cの「小さい頃から習うことができなくて、体が弱かったことですし」などにその想いがあらわれている。

また、「きちんと」習いたいと考えるCの発言から、昔ながらの子供のお稽古観を抱えていることが推察される。その場合は、大人のピアノ学習でしばしば使用されるポピュラー曲を簡易化したような学習材ではなく、教則本に従ったピアノ学習を想定しているとも考えられる。そうしたピアノ学習観によっても、取り組む楽曲や過程も変わってこよう。このインタビュー項目においては高齢者としての発言とみなせるものはBの「ボケ防止」「生きてるうち」以外、特に目立つことはなかった。

4. 2 ピアノ学習における難しさ

ピアノ学習で高齢のピアノ学習者が感じた点については、様々な内容が語られた。大きく分けるならば、演奏に関わる内容とそれ以外の内容である。簡単にまとめると下記ようになる。

演奏面—指の動かし方、両手で弾くこと、指使い、黒鍵を弾くこと、重音・和音の弾き方、オクターヴ奏法

それ以外—読譜、視線、拍の数え方・音符の長さの認識、調性、移動ド、曲が進んでくると意識すべきことが増えてゆくこと

4. 2. 1 演奏面

【指の動かし方, 両手を使用すること】

A. 右手と左手で違う鍵盤を押す(ママ)。特に左手の動きが、初めての動きだったものですから、動きが悪かったのと、難しかったですね。

B. 始めたころは、指が思うように動かなかったですね。生まれてからこんなに指を使ったことはないです。まさにボケ防止にはぴったりというか。

(略) 両手を使うのは今も難しいです。

【指使い】

B. あと、ピアノって5本の指でメロディーを弾かなきゃならないから、指くぐりをするでしょ。指使い…指番号になかなか対応できなかったです。

C. 私は、指使い、指がちょっと最初、5の指、1の指が。これは大変と思いましたね。そういうことは全然知らなかったんですよ。5の指、1の指ね。(略)でも2と4をいまだに間違えたり。ですから指使いというのは非常に大変だということをつくづく思っています。で、間違っただけで弾き始めると、覚えてしまうと、直すのに大変な苦勞をしますから。

【黒鍵を弾く】

B. 白い鍵盤よりも黒い鍵盤は高さがあるから、指がちゃんと上がらないときがあります。

C. 黒鍵との兼ね合いがなかなか難しいんですが。

【重音・和音の弾き方】

B. 一度に片手でいくつかの音を弾くのがとても苦痛です。

C. 私は和音が苦手なんですけど、それも慣れですか。どういう風にやると、まずあれですか。(略)なかなか和音でポンポンと上がっていくのが。それはコツがあるんですか。

【オクターブ奏法】

C. オクターブっていうのはね。私は届きますけど、しっかり弾きながら見ていないと指が違うところに行くんですから。こうやって離しちゃうんですか、そうすると非常に難しいんですよね。次にでたらめなところに押しちゃうんですけど。

ピアノ学習における難しさについては、経験年数が多いB、Cのほうが、技術的に難しさを伴う曲に取り組んでいるからなのか、多く語られた。

技術的な点について、高齢であることから述べられた発言は特にみられない。

4. 2. 2 演奏面以外

【読譜】

A. 大体見てすぐに何の音かっていうのが、まだ正確にわかっていませんので、楽譜の見方というのは難しいですね。

-先生はあまり楽譜の見方について、時間をとってやっていないようですが、本来だったら楽譜を読む時間を作りたいというような、何か要望はありますか。

A. 楽譜を読みたいとかは、別段それほどではないですね。やはり、いかに指が動けるかというほうがいいかなとは思うんですけど。

-そうすると、弾くことの補助で使いたいということですね。

A. はい。

B. 楽譜をもう少ししっかりと読みたいです。ト音記号は大分マスターしたんですが、ヘ音記号はまだすぐに解読できません。先生は模様のように読めるといっていいけど、一つ一つ見ないと弾けません。

【視線】

A. 一時に、左右の手を見なきゃというか、見なくてもどこがどの音かわかればいんでしょうけど、それがなかなか覚えきらないという感じですね。

-視線をどこへ向ければよいのかということですね。

A. そうですね。

ーそれは、ピアノを弾くだけではなく例えば、楽譜を読みながらというのも難しいところですか。

A. ええ。

C. それで、何小節、今ここと思っても見るときに違うところを見ちゃうことがありますね。それで全く、あれ違ったところを弾いているっていうことが少しわかるんですけど。

【拍の教え方、音符の長さの認識】

ー(略)はじめは、指使いが難しかったんですね。他に思いつくものというのがありますか。

C. 私は、高等女学校という時代ですから、それも高等女学校1年で戦争になりましたしね、やっていないんですが、ただ姉が少しやりましたけど、あの人は教えてくれませんでした。何拍、音符を見て、ここは何拍数えて、それがなかなか。今でも少しでたらめな時がありますから。

ー拍や音符の教え方が難しいんですね。

C. 譜をみて、よくわからなくちゃいけないんだ、今はわからなくちゃいけないんだと思います。

【調性】

C. そういうことで、まあ譜を読むことをね。少しよく勉強してそれから、いろいろシャープが変調(ママ)していくあれが難しいですね。こんなにシャープがついているから、これは大変だわとね。見たときから思うのはだめですけど。ああいうのは慣れていくんでしょうか。何年、それは何年って言えませんね。私はまだ最初の最初の頃ですからね。

【移動ド】

C. そうですね。私は割合、よくわからないんじゃないですか、根本的なこと。

ーそれは例えばどういうことですか。

C. 例えば、その変調していくとき(ハ長調・イ短調以外の調性のとき)には今弾いているのでもレから始まりますね(この場合はニ長調)。レをどうしてもドと思っちゃいけないんですけどね。(略)ピアノの鍵盤をみるとレなんだけど、その調でいうとドだからドと感じてしまう。ごちゃごちゃになってしまうんですけど。

ーもし弾いているときに、レの音を弾いていてもドレミというとき(相対音感で考えているとき)にはそのように教えてもらいたいという気持ちがある。

C. はい。歌はその調に合わせて変えていっていいわけですよね、歌はね、弾くのと違って少しぐらい外れたって少し外れていますよって言われるくらいですけど、ピアノはもろに音が違っちゃうから、これはとつても私慎重に、うかつに押したら違う音が出たらその曲がめちゃくちゃになる。ですから、練習の時にはいいんですけど、慎重になればなるほど間違えたりするので、どうも神経を使っちゃったりすると、大体震えてくるのがわかるんです。緊張して。

【意識すべきことの増加】

A. メロディーに合わせる、楽譜だけではわからない、感情ですとか、メロディー、自分ではこの曲はわかっているんだけど、そのメロディーと自分が叩くのが合わないというのが、それを合わせるのがこれほど難しいとは思わなかったですね。

B. だんだんと弾き方はわかってきたような気もするんですが、普通に弾けたと思ったらこんどは、強弱。強弱も、左右の手で変えなきゃいけないかったり。できたらできたで、求められることが増えていきますよね。それがピアノの醍醐味なんでしょうけど、アップアップしてしまうことがあります。先生が弾くと簡単そうなんですけどね。私は歳だから追いつかなくて。

Aは、読譜について難しさを述べながらも、読譜は補助的なもの、「読譜<指の動き」と考えていた。一方、B、Cには楽譜を理解することを重視している発言がみられた。

AとCは、目線をどのように保つか、その難しさについても述べている。

Cは歌を習っていた時期があり、その際、移動ドで習ったという。現在は習ってはいないものの、曲によって、固定ドで考えられない場合があるという。相対音感でとらえてしまうCと、絶対音で指導する指導者。そうしたずれがあった場合は学習者に寄り添い、指導者も移動ドで教えてほしいと望んでいることが述べられた。

Cはまた、緊張して震えるなどとも述べているが、

ピアノ演奏においては、年齢、経験を問わず起こりうることであるため、特に高齢者特有のものとしては捉えられないと判断した。しかしながら、慎重になるほど間違える、神経を使うという点とあわせて考えると、高齢であることが何らかの形で関係している場合も考えうるが、その後の発言からもその点を聴き取るには至らなかった。

4. 3 現状のピアノ学習で感じていること、要求・支援

次に、ピアノ学習への要求等について語られた発言をみていく。

【音楽用語の理解と指導者の助言】

C. 私はあんまり、音楽的な言葉を知っているような知らないような変なあれですから、知っていることもあるんですけど、何をおっしゃっているのかわからなかったことがあるんです。それと、私は、フラットとあれ（シャープ・ナチュラル）はわかっているんですね。でもそれが瞬間にわからずまごまごして。

C. とにかく私はなんだか、ミだか何だかなんかおっしゃられても、カーッとなくなってわからなくなるんですね。ミはミなんですけどね。オクターブ上がって、あんまりいろいろ、こう、まごまごするときがありますけどね。

要求として直接的に語られたものではないが、初歩にあることを認識しているCに対する指導者の助言が学習の援助とならず、むしろ阻害する場合があったことが述べられている。尚、ここで妨げとなった指導者の発言は、学習者がピアノを演奏中に発せられたもののみ限定して述べられていた。

【選曲について】

B 今やっている曲集も前にやっている曲集も好きな曲が多いのですが、たまに曲に違和感を感じる時がありました。物足りないっていうか、左手なんですけど。気持ちに余裕があるときは、もっと音符が多くても大丈夫っていうか。

B 大体はいいかなと思います、大体は。でも、下手でも、もうちょっとおしゃれな伴奏がいいとか思っちゃったりします。いけないわね。
- そのような考えを伝えてありますか。

B. 伝えてみることもあるけれど、先生はいくつか探してくれたりしても、なんかピンとくるものが正直なかったかな。

Bは取り組む曲について、簡易さ、弾き甲斐のなさを継続的に感じている。

次にレッスン室の環境についての語りである。

【レッスン室の環境】- 照明

B. 私は老眼であんまり目がよくないから、ちょっと暗いと思います。電気（照明）は先生が特別製のものも含めて全部で6つつけてくれるし、いろいろと照明位置なども気にしてくださいって、調整してくれるんですけど、ピアノを弾くとなるとには私にはつらいです。もう少し弾きやすい明るさだとうれしいです。お昼時に何うと、今度は窓からの光が明るすぎるときがあって。先生には申し訳ないけど、見えないときはもうそのまま目に頼らず、感覚でやってしまう感じです。

C. そうですね。目のほうはだんだんに（見えるようになった）、去年手術しましたから。

- 手術する前は どうでしたか。手術する前に楽譜を読むことはなにか…

C. ちょっと付点が見えないとか、それから五線紙の何本目かがだんだん見えづらくなってきて。ですからラとドを間違えたり、それって大変なあれになりますよね。ですから、（楽譜を）拡大して。

- 実際に、例えば部屋を手術する前は明るくすればもうちょっと見やすかったとか、何かありますか。

C. はい。ただ、やっぱり、明るくして手元楽譜のところをよく照らさないといけないんですよ。ですから、部屋が明るくっても。ですから、どうしてもああいうの（補助ランプ）が必要なんです。

- 明るくすれば、いいというものでもないのですね。

C. そうですね。明るいのは全体的に手術したらなったんですけど（ママ）、結局、高齢の老眼も入ってどんどんぐずって。

BもCも自身の視力に問題を感じている。ピアノ教室の照明について、指導者は一定の気遣いをみせては

いるが、学習者が見やすいと感じるところまでは到達していない。

上記の他、自宅と教室の環境の違いについて下記のように戸惑っている様子が語られた。

【レッスン室の環境】—グランドピアノ

A. やっぱり、音が、うちは電子ピアノなんですけど、音の幅というか、雰囲気は全く違うので、もちろん、こちらで弾かしていただいている音のほうがいいんですけど、そういう響きは家ではなかなか味わえないですね。

—では、レッスンに行っても、そういったものが味分わえるということですか。

A. はい。

—戸惑うというほどではないですか。

A. それは、あまりないんですけど。

B. ピアノの（補足：鍵盤の）重さが違う感じがします。それはこの形のピアノ（補足：自宅はアップライトピアノ、レッスン室はグランドピアノ）だからなのか、家のピアノが古いからなのか。あとは、楽譜の位置（補足：譜面台の位置）が全然違いますよね。うちのほうが手に近くなって。一時期、先生が補助台を付けてくれたけど、手が当たったりしたので結局外してしまいました。今はもうだいぶ慣れたんですけど。

—楽譜台が遠いグランドピアノで弾くとどうなりますか。

B. うーん、楽譜を見ることが間に合わないから、覚えている感じで弾いちゃいますね。

—覚えている感じで弾くとどうなりますか。

B. うまくいくときはいいけど、楽譜をみて弾かなきゃいけないときはひっちゃかめっちゃかになるか、止まっちゃいますね。で、以前注意されたところを楽譜に書きこんでいるんですけど、それらはどこかへとんでっちゃいます。

C. うちの電子ピアノは良いらしいんですけど、やっぱり全然違いますね。

—どういったところが違うと感じますか。

C. ですから、音の響きも違いますし、それからペダルがまた全然違うんですね。これは、ペダルが恐ろしく違います。

—レッスンに来ると弾きづらいなという気持ちになりますか、それとも家に帰って。

C. 家のは慣れていますがとっても不足ですね。とっても満ち足りない。ちゃんとしたピアノで弾けばもっときれいに弾けるはず、ですからグランドピアノを弾きに（補足：時間貸しをしているピアノレンタルへ）行くと確かにきれいで、レッスンに伺って弾きますとね、ああそうだなと思っていますね。限界として、あと2、3年電子ピアノではもう駄目かなあなんて思っております。電子ピアノって遊ぶものですよ。

レッスン室のピアノが弾けることに喜びを感じているAに対して、レッスン室のピアノが弾きづらいと感じるB、自宅のピアノに不満を持つCなど、様々な捉え方がみられた。そうした感じ方は、それぞれピアノ学習の意欲に関わるものとしても表れている。

B. 楽しくお稽古しているんですが、できれば本物の曲もこれからやってみたい。

—本物の曲とはなんですか。

B. 例えば、ショパンとかモーツァルトとかで、簡単にしていない曲。リストの愛の夢とか簡単にしたもの弾くときれいなんですけど、CDで聴くのとだいぶ違うんですね。いつそれにチャレンジできるんだろう、もう無理なのかなって。

B. 弾けても、弾けなくっても、全部弾けなくってもいいから有名どころだけでも弾いてみたいなって思います。

前項とあわせて、Bが楽曲に弾きごたえを感じていない姿、簡易化された楽曲選曲のミスマッチがみられた。そうした要求がありつつも指導者に直接伝えられている場合と、伝えられていない場合がみられた。理由の1つには、次のように指導者への信頼というものがあつた。

【指導者への信頼】

B. そうは思っているけど、私の進み方とかをすべて先生が知っていらっしゃるから。

C. 私がそんなこと言ってね、そんなの私ができるかできないかというのを先生が一番よくわかっていると思うんですよ。

A. 最終的に弾き語りというか、自分の好きな曲を1曲でもできればいいなという安易な気持ち

ちでやっていたんですが、実際奥が深いですね。弾き方なども。どこまでできるかわかりませんが、ある程度の自分なりのマスターの仕方が、納得できればいいかなと思うんですけどね。

-では、弾き語りみたいなものを挑戦できたらと思うんですね。(本来は弾き語りを望んでいる。まだ、一度も学習していない。)そのことを指導者には伝えましたか。

A. ええ。レッスンに通い始めるときに。

-それでも、まだ弾き語りには挑戦していない。

A. はい。

-取り組まないことについての説明はありましたか。

A. いいえ、ありませんけど、もうちょっとうまくなってからがよいのかなと。先生もそう考えているのかなと思っています。

学習過程について指導者を信頼しつつ、任せる姿がみられた。またそれにより、学習要求は満たされぬまま学習者が心にとどめてしまっている様子もみられる。

しかしながら、上記のように指導者への信頼感とは異なる形で伝えていない場合もあった。それは、自身の能力や年齢をネガティブに考えている場合である。

【初心者であること、高齢であること】

A. 正直、僕の腕では(曲の仕上がりを判断することは) はやいと思います。正直な話。

B. なかなか言えないわ。そんなおこがましいこと。

B. いただいた楽譜が、その順番になっているから文句も言えないし。今の自分にちょうど良い曲なんてあんまりないでしょ。下手で高齢なのに、欲が出ちゃうのね。

B. 私は高齢だからか、準備に時間がかかるんです。その点申し訳なく思っています。

B. いっぺんに音を3つ弾くときは、それでいっぱいいっぱいになってしまって、メロディーを楽しむというよりも、ピアノを弾くのが大変って感じるがありました。そのせいで、曲が進まなかったり。私には時間があんまりないのに、こんなのでひっかかっちゃうと時間というか人生を無駄にしたような感覚がしました。

C. そうですね、やはりとても高齢で、色々まあちょっと状態として若い人に比べ劣りますから。

C. これは若かったらそんなことはないんじゃないかとか、まあそこに結びつけてはいけなんでしょうけど、うちに帰って娘に言いますとね。それはおかあさん、しょうがないわよっていつもいわれるんです、

C. もっとよく楽譜をみて弾くということにしないといけないと思うんですが、非常に年取ってきているせいか、そこいらへんが、申し訳ない、私も自分でダメって思っていますけどね。

Aは次の曲へ進むかを決めるのは指導者であるとして、その点においては自身を客体として捉えている。

上記のように、これまでの　とあわせてみると、後期高齢者であるBとCは年齢的な点についてある種ネガティブな語りが多く見られた。しかしながら、そうした言動は学習意欲があるからこそそのものとしても文脈からは捉えられる。

また上記の他、伝えきれていない要求として、レッスンの内容に関すること以外のことでも次のようなのがみられた。

C. お願いがございましてけど、ほかの方が前に弾いていらっしゃるとき、(補足：玄関ベルを)鳴らしてもよろしい？暑くて暑くて。玄関に掛けさせてもらえるといいんですけど。すみませんけど5分か10分早くついでしまったとき。冬のほうが我慢できますけど。

-その点については先生にはこれまでお伝えしたことはありますか。

C. いえ、ありません。

さまざまな学習要求について、学習者は指導者の支援を認めつつ、満たされない部分については自身の要求を少しずつ調整・修正し、現在のピアノ学習を肯定的に捉える姿もAとCにみられた。

【学習要求を調整・修正する学習者】

(Aが希望していた弾き語りに取り組まないこと、一冊の曲を順番に取り組んでいることについて)

A. まだ、僕の場合は基礎段階だと思うのと、いろいろな弾き方、それから、楽譜の内容も多種多様ある、ごく一部しか自分でも把握できて

いないので、順序立てて教わるのが僕は一番いいと思うんですけど。

【自分なりの課題意識・目標設定】

A. 今のところは、レベルについていけないから、どこまで習ったことを実践できるかですね。

C. 丁寧に楽譜を見ることをしないといけないんです。私はね。

C. でもまただんだんね、私、86ですけど、90までとにかくお稽古を始めて10年はしたいと思っていますから、あと3年か5年は頑張りたいと思っています。

C. 「ここまで弾けた」と思って終わりたいなと思います。

ピアノ学習を始めたころとは異なる現在の学習動機や課題意識も語られた。

5. 考察—高齢者のピアノ学習者の支援

本節では高齢者のピアノ学習支援について、考察してみた。

(1) 高齢であること

本研究では、演奏における困難な点については、高齢であることよりも初歩の学習者であるという自己認識から発言されていた。難しさにおいて述べられていることには、高齢者特有のものは「私は歳だから追いつかなくて」の他は見られず、ピアノ学習の初期において多くの学習者が課題とするものばかりである。しかしながら、Cのように「状態として劣る」という発言もあり、そうした捉えは、言葉としては現れずとも絶えず意識されているものとも考えられる。しかしながら、その発言後の文脈においては楽譜をみて弾くということに限定して述べられていた。

本インタビューにおいて高齢であることは、

- ・視覚的問題—老眼・拡大コピー
 - ・準備に手間取る
 - ・ピアノに関われる時間の制約、ピアノ学習の終わりの認識
 - ・自身の学習要求を抑制
- 等の点に関連して述べられた。

また高齢者とは断定できないものの、「カーッとなくなってわからなくなる」といった点も何らかのかかわりがある可能性は否定できない。

視覚的な問題においては、指導者が照明を追加し、位置を調整する、楽譜台を新たに設置するなど支援的な取り組みをしているものの解決には至らなかった。指導者自身では照明の明るさなどについて細かい点はわかりかねるため、その日の高齢ピアノ学習者のコンディションに最も合うようなセッティングにする時間を学習過程に具体的に位置付け、学習者に納得してもらい進めるなどが必要であろう。その際、高齢の学習者主体で行うほうが効果的である場合もあろう。

ピアノに関われる時間の制約、ピアノ学習の終わりの認識もあげられたが、支援の視点として重要なものである。あと何年できるか、どこまでできるのかといった点を気に掛けるB、Cの語りを考えると、学習の終わりがかたを共有して、学習を継続することは重要である。特に若いピアノ指導者は、そうした認識が高齢のピアノ学習者よりも薄くなってしまふことは当然のことであろう。また、健康な高齢者に接していると、そうした終わりを認識する必要があるのかという感覚を持つ場合もあろう。そうになってしまうと、高齢のピアノ学習者が抱えている未来志向の学習要求が、かなり厳密に時間軸を意識して捉えていることに気づきにくくなってしまふ。何に向けて学習を進めているのか、いつ、どの時期に、どこまでできるのかという意識も共有することは、とりわけ後期高齢者を対象とした学習では欠かせない。その点は、ピアノ学習を中断しても、そののちに取り組む可能性のある、子供や後期高齢以前の成人とは異なる視点が指導者に問われよう。

(2) 指導助言のタイミング

演奏時における助言が有効に働くときと、働かないときがある点が述べられていた。インタビューでは主に後者の点が語られ、即時的反応が難しい高齢／初歩の学習者には負担となっていた。そうした演奏中の助言等は、ある種、自分のペースで行えない、気を散らしてしまうという点において、混乱を生むため、その働きを配慮しつつ発言する必要がある。

(3) 選曲、学習動機・学習における変容と把握

ピアノ学習開始時の動機の聞き取りにおいては、伝統的なピアノ学習観を抱えているのか、またそうした学習を望んでいるのか、反対に、そうしたものよりも初歩の大人が楽しめるようなピアノ学習を想定しているのかについてしっかりと捉え、共有する必要がある。

また、そうした学習者の要求は、学習の進展において徐々に変容していくものである。そのため、ある時

期にそうした要求や希望を聞きとるだけにとどまらず、これもまた継続的に捉えていく必要がある。

しかしながら、初歩の学習者でもあるため、取り組みたいと考える曲を弾いても満足できない場合もある。たとえばBのように、より難しいものを希望する学習者の場合は、それを丁寧に説明するとともに、現在の曲でどういった内容が学んでいるのか、その学習が希望する曲の演奏にどのようにつながるのかについて伝える必要がある。その際、Bが求めていた本物感というものがどういった点で感じられるのか、どういったことができれば満たされるのかについても聴き取る必要がある。

本物感を感じ取りたいBのような学習者にはピアノ中級・上級者が用いるような演奏上の技術(コツ)を教えるなども有効ではないか。例えば、ピアニスト・ルービンシュタインが、自身の演奏能力の加齢による衰退を、印象操作(速い演奏箇所の前はよりゆっくりと、など)⁹⁾といったダイナミズム等で補完していたなどを参考にしてもよいだろう。

またあわせて、初歩の学習者は何が基準となり難易度が決まるのかそれ自体が理解しづらいということも考える必要がある。元吉は、シニア向けのピアノ学習講座に参加した学習者の選曲に関する言葉として、「楽譜の読み方もわからない、何もわからないのだから選びようがないし、どの程度の曲が自分にも弾けて、どの程度が無理なのかもわからない(略)」といった事例を挙げている。¹⁰⁾

上記を配慮するとともに、問題意識や要求等を共有する際には、高齢だから、初歩だからということで伝えるのをためらう、指導者を信頼しているからこそ伝えないことがある点を踏まえる必要がある。学習者自身で解決、納得しようとするこうした物分かりの良さは、指導者との関係性を壊さずにうまく進めてゆける半面、学習者の自己実現が、先送りされているとも捉えられる。Aが最も望んでいたのは弾き歌いであったが、弾き歌いをするということは、ピアノを弾くこと以上にさまざまな側面を求められるものの、コード伴奏による弾き語りなどは、ピアノ初歩であっても、高齢であっても、可能なはずである。

他者が抱くエイジズム、というより、自分自身が高齢期であるというエイジズムにとらわれている様相でもあり、指導者はその点を配慮すべきである。

(4) 指導者への依存と学習者の主体性

ピアノ学習における難しさや、ピアノ学習における学習要求とのずれ等を検討してきた中で語られた内容

のうち、高齢のピアノ学習者3名に共通して見られたのは、指導者併存しつつも、どのように主体として学びを構成するかということであった。

先にも述べたが、初心者である高齢のピアノ学習者は、ピアノ学習が本来的にどのように進められるのかということが包括的に意識化できない存在であり、他方、指導者はそのプロセスを熟知している人という捉えにあることである。

(3)で述べた継続的な確認と了承というものをしていく中で、学習者Cのように、日々揺れ動く自分の主導性と依存性を認識している場合は、前回主導的に述べたものの、その後は依存的側面が強くと表れるということは起こりうるものである。そうした揺れ動きを活かしつつ、主体性を何らかの点において保持し、進めていき、固定的なものにせず、新たに更新し続けてゆく姿勢が問われよう。

(5) 他のピアノ学習者との交流

本研究では学習者と指導者が、マンツーマンで行うピアノ学習のみを対象としたが、学習者Cのように、他者の進捗がつかめず、自分だけが遅いのではないかといった点を心配する場合も起こる。高齢の学習者が他者、とりわけ年齢的に差のある学習者と比較してネガティブに捉えてしまう危険性はあるものの、学習において苦勞している点や現在の課題意識などを、指導者を交えて伝え合うことも一つの有効な支援といえる。年齢に関係なく、ピアノ学習において難しさや課題をもっていることを理解してもらうことは意味のあることであろう。そのために、そうした他者、他年代のピアノ学習者にも協力を求めつつ、指導者が相互交流を積極的に促すなども、一つの有効な支援としてあげたい。

6. おわりに

高齢期にピアノ学習を始めるということは、技能的、音楽理解の側面において、負い目ともなりうる点はあるが、ある種の未来志向、これができたら次へというある種の希望を持っている姿が捉えられた。高齢であり、初歩であるという中において学習者が望みうる最大限の自己実現が果たされるよう、指導者は支援する必要がある。

本研究では、前期高齢者、後期高齢者の両者を対象として行ったものの、その差についてはほとんど言及できなかった。超高齢社会という観点から考えると、そうした差にも言及してゆく必要性がある。その点

を今後の課題としたい。

また、本研究で対象とした3名以上にピアノ学習への難しさ、つまずきを感じている高齢のピアノ学習者には、さらなる支援が求められるよう。継続して検討していきたい。

引用・参考文献

- 1) 鎌田実, 秋山弘子, 辻哲夫, 前田展弘, 東大が作った確かな未来視点を持つための高齢社会の教科書, 第1刷, p.14, 株式会社ベネッセコーポレーション, 2013年
- 2) 前掲書1, p.14
- 3) 内閣府, 平成25年度版高齢社会白書, p.2, 印刷通販株式会社, 2013年
- 4) 前掲書1, p.1
- 5) 前掲書1, p.15
- 6) 堀薫夫, 関口玲子ほか, 新しい時代の生涯学習, p.175, 有斐閣アルマ, 2002年
- 7) 前掲書3, p.43
- 8) 元吉ひろみ, シニア世代に教える最高のピアノレッスン法, p.26, ヤマハミュージックメディア, 2013年
- 9) 堀薫夫, ポール・バルテスの生涯発達論, p.178, 大阪教育大学紀要第IV部門第58巻, 2009年
- 10) 前掲書8, p.73